

尚志女子サッカー部 松本克典監督

「富岡魂」ともに女子サッカーの未来を切り開く。尚志福島女子サッカー部監督の松本克典(45)は2011年3月11日、勤務していた富岡高で東日本大震災を経験した。福島第1原発から10キロ圏内にあり、避難したサテライト校舎で17年まで、同校の隆盛と休校までを見届けた。被災から10年。苦難から多くを学び、創部3年目の尚志を初の東北女王に導いた指導者の熱い思いに迫った。(敬称略) 【取材構成＝相沢孔志、中島正好】

20キロ圏内ギリギリ

富岡の海で波にさらわれたと思われた種は10年後、郡山の地から尚志が頂点に立った。決

赴任7年目の春

勝は4-0で仙台大明成(宮城)に完勝。創部から指揮する松本も「初めて同じ学年での勝負となり、目標にはしていたが、その大会で結果を出せたことは本当に出来過ぎです」と謙遜しながら、久しく続いた宮城勢の東北タイトル独占を切り崩した快挙になった。

10年前、松本は富岡で赴任7年目の春を迎える準備を進めていた。07年度から4年連続で全国高校女子サッカー選手権出場を果たすなど、指導者でも順調に階段を駆け上っていた最中、「3・11」を迎えた。

学校が避難所に

富岡高校として長い放浪の旅の始まりだった。富岡高校として長い放浪の旅の始まりだった。

「感謝の心と謙虚な気持ち」は、被災から10年の歩みを経てたどり着いた松本の信条でもある。そして「サッカーを通じ人として成長する」全国を代表するチームになる②など、こじや3つのビジョンを掲げて活動する。トレンコーチで学んだ1年で、新たな指導方針に至った。

「得るもの多かった」10年経て



選手たちに指示を与える尚志・松本監督 (撮影 相沢孔志)

福島になでしこの花咲かす

異例12年間勤務も

富岡は同5月10日、サテライト方式で学校生活を再開させた。運動部の拠点施設を考慮した。男女サッカー部は福島北、東京五輪代表・桃田賢斗(20)が2年生で在学していたバドミントン部は猪苗代など、5つの高校校舎を借りる形で再スタート。震災前と同等を望むべくもなく、練習環境は激変した。

高の生徒が部活で利用するの、私たちは市の施設を借りた。平日は空いていてもイベントがあるときは譲り、土日は活動場所はなかった。初年度は学校の駐車場を基礎トレーニングとか。それでも選手は現状に不満を言うことなく、できることをやろうという空気感がありました。

同僚励みに

男子サッカー部監督の佐藤弘八(現相馬高)とバドミントン部監督の大堀均(現トナミ運輸)コイチだ。男子サッカーは13年に5年ぶりの選手権出場を果たし、バドミントンは震災後も全国総体の男女団体で表彰台を守り続けた。女子サッカーは15年、ふたば未来学園の2人を加えた14人の合同チームで、初の全国総体切符をつかんだ。

福島の公立高校教員は7、8年のサイクルで転勤する。だが松本は休校まで、異例の12年間勤務した。8年目に震災が起きてサテライトが終わると思ったら休校が決定。12年というのはありえないですね(笑)。ただ異動したいとは思わなかった。

女子サッカーの可能性

17年は日本サッカー協会(JFA)の東北担当ディレクターとして、東北各地で選手視察。監督を離れた離れの1年、指導者として貴重な財産になった。

今年には全国高校総体初出場を狙える位置に。総体出場2枠を争う6月の東北高校サッカー選手権(青森)は、各県優勝校によるトーナメント戦。尚志が東北新人を制したことで、福島代表に第1シードが与えられ、宮城代表とは別ゾーン。決勝進出で全国出場が決まる。

頑張り東北ニッカン6県版



高田実佑さん 鈴木萌生さん (尚志高)



パス練習を見届ける尚志・松本監督(左)

「富岡で女子サッカーの可能性にひかれた。震災の年になでしこジャパンが(W杯)で世界一になり、10年から女子サッカーインターハイに出場可能となく、自身にとっては、15年以降の全国舞台の咲きを見据える。選手権2度の4強座を持つ男子サッカー部に負けじと、福島になでしこの花を根付かせていく。

今年から団体でも少年女子の部が始まる。女子の変革期に携わっていることは幸せ。教える場所が変わっても、福島の子サッカーの発展と強化に尽くす思いは変わらない。

●広田大和 ●ひなた・やま ●2008年(平15)10月28日生まれ、青森・八戸市出身。小4から相模原FCで野球を始め、中学は八戸中軟式野球部に所属。八戸西では全量キャプテン入り。175センチ、82キロ。右投げ右打ち。速投105キロ。好きなソフトボール選手は日本ハム中村浩二。